

# きたがきくにみち 北垣国道

## 高久嶺之介

(大学人文科学研究所教授)

はじめに

一八九〇(明治二三)年一月、新島襄の死は目前まで迫っていた。一月十日、大磯で療養中の新島は京都府知事北垣国道に書簡を送った。内容は、前年十二月アメリカから帰国して理化学学校で応用化学の教授となる下村孝太郎へ引見することを懇望する書簡で、下村の知識が京都府下の職工にとっても利益になることを示唆していた。下村は、この後北垣の娘とくと結婚することになるが、下村と北垣家の関係は、この新島書簡に始まる。

それから十一日後の二十一日、新島は北垣に遺言を残す。それは、新島の悲願であった同志社大学設立運動への援助を感謝するとともに、今後の同志社の行末を気にかけてくれるよう懇請したものであった。

新島にとって、北垣との出会いはまさに幸運であった。北垣なくして同志社大学設立運動の展開はなかった。北垣と新島との関係は、明らかに京都府の地方長官とその治政下の一私立学校の長の関係を超えた信頼関係にもとづいている。

北垣とはどのような人物か。北垣と新

島・同志社との関係はどのようなものであったか。『新島襄全集』、北垣の日記『塵海』など諸史料を使用して、その点を素描してみよう。

### 一 北垣国道とは

北垣国道は、天保七(一八三六)年八月二十七日、但馬国養父郡熊座村(現兵庫県養父郡養父町)で庄屋北垣三郎左衛門・りきの長男として生まれた。幼名晋太郎。天保十四(一八四三)年七歳の時養父郡宿南村の儒者池田草庵の青谿書院に入り、漢学を学ぶ。青谿書院での勉強

は二十年に及ぶが、同門には遠縁で後の横濱正金銀行頭取原六郎がいた。文久三（一八六三）年一月、時の尊皇攘夷運動の影響を受けて郷里を後に上京する。そして、その年の十月、平野国臣の但馬生野の変に加担するが、事失敗の後、因州、ついで長州に逃れる。何時の時点か不明であるが、この間同じ尊皇攘夷運動を通じて出会う松田道之（後の滋賀県令、東京府知事）の推挙を得て鳥取藩士になる。明治元（一八六八）年一月には、新政府軍の北越戦争に加わり、功により鳥取藩の応接方になる。その後、明治政府に出仕し、明治二（一八六九）年六月太政官より弾正少巡察を命ぜられ、すぐに弾正大巡察になる。その後、明治四（一八七二）年八月、北海道開拓使七等出仕になり、一八七四（明治七）年まで、浦河支庁、樺太支庁在勤を含め、北海道開拓事業に本格的に従事することになる。

一八七五（明治八）年十二月、北垣は元老院少書記官になるが、一八七七（明治一〇）年四月西南戦争下の熊本県大書記官になり、功により翌年七月内務省の庶務局長になる。順調な出世と言ってい

い。一八七九（明治一二）年六月、高知県令に任ぜられる。翌年三月には徳島県令を兼官する。高知、徳島の県令は一八八〇（明治一三）年一二月、依願免官まで続く。当時、高知県は自由民権運動の拠点であった。この地で人心を掌握し無難に県治をおこなったことが、翌年一月第三代京都府知事任命の布石になる。

一八八一（明治一四）年一月、北垣は京都府知事に任命され、十一年半にわたって京都府政を主導し、琵琶湖疏水など京都の近代化に足跡を残す。一八九二（明治二五）年七月内閣より内務次官に任命されるが、これを固辞し、以前より関心を持ち続けてきた第四代北海道庁長官に任命される。北海道庁長官時代は一八九七（明治三〇）年七月までの五年に及ぶが、小樽運河や鉄道など社会資本の整備、北海道移民の奨励などに力を尽くす。長官辞任後は、貴族院議員、枢密院顧問官など歴任する。晩年は京都で過ごすが、一九一六（大正五）年一月十六日、京都市上京区の寓居で八十一歳の生涯を閉じた。

## 二 北垣の「任他主義」

北垣が京都府知事に就任した直後、民権家小室信介（筆名大江山人）は『大坂日報』紙上に「京都府治将来ノ目的」を連載し、前知事横村正直の「干渉主義」に対して、北垣の場合は「任他ノ主義」として期待を表明した。北垣の初期の京都府政を特徴づける場合、「任他主義」とは言い得て妙である。要するに、北垣の府政は、自己の独裁的権力行使をできるだけ避け、府官僚のみならず民間の人物を活用して府政を円滑に進めていくという特徴を持っていた。したがって、京都府会においては府会議員によって選出された常置委員にかなり運営の主導権を任せ、一八九九（明治二二）年に登場した市制特例下の京都市会においては市会で選出された名誉職参事会員にも運営上かなりの権限を与えた。

問題は、北垣が「任他」しようとした人々はどのような人々であったかである。府の官僚たちを除いて民間の人々で言えば、京都府会の議長・副議長・常置委員などの役職者たち、京都商工会議所



の役員、一八八九年以降の京都市名譽職  
参事会員の人々がそれらの人々であつ  
た。人物で言えば、田中源太郎、松野新  
九郎、西村七三郎、浜岡光哲、中村栄助、  
西川義延、田宮勇、雨森菊太郎、伊東熊  
夫、高木文平、内貴甚三郎などの人々で  
ある。とくに接触が密であつたのは、浜  
岡光哲であり、その従兄弟で京都府会議  
長を長年つとめる田中源太郎も関係が深  
かった人物である。このような人々は一  
部を除き府会・市会の多数派を形成して

要なことは、北垣が依拠しようとした  
人々が、同志社に関わつた人々、大学設  
立運動に関わつた人々が多いことであ  
る。北垣が、京都府行政を「任他主義」  
にもとづいて進めようとするれば、浜岡、  
中村など同志社人脈を無視して行政を進  
めることはできなかつた。ただし、山本  
覚馬については、北垣が京都に赴任以降  
府政への影響力を減退させており、山本  
の存在が北垣を同志社に近づけたといふ  
ことはできない。

おり、北垣の  
「任他主義」行  
政は府会・市  
会の多数派連  
携行政でもあ  
つた。この多  
数派連携行政  
は、北垣府政  
の末期には、  
その矛盾を露  
呈していく  
が、この点は  
紙数の関係で  
省略する。重

では、北垣は自己の統治の必要性ゆゑ  
に新島に接触したのだろうか。どうもそ  
れだけとはいえない。北垣は、西洋文明、  
とりわけ西洋科学技術の吸収に熱心であ  
つた。一八八九年琵琶湖疏水の水力利用  
の方法を電気に切り替えることを決断し  
たことは記憶している。そして西洋文明  
にともなうキリスト教に対しても抵抗感  
を持つていなかった。北垣がキリスト教  
に偏見がなかつたことを示す史料は多い  
が、ここでは、京都府下の神官など反キ  
リスト教の人々から「耶蘇教心酔者」と  
みられていた事実のみ指摘しておく。

### 三 新島と北垣の接触

北垣着任直後には新島と北垣の接触が  
始まつたらしい。一八八一年一月、新島  
は、A・ハーデイに手紙を書き、新任の  
京都府知事が自分に会いたいといつてい  
ること、その際には京都における教育制  
度の改革案を出したいこと、等を伝えて  
いる。就任直後北垣が新島との接触を積  
極的に図ろうとしていたことは注目して  
いい。

北垣と新島・同志社とのかわりは、

さまざまな点であられる。

第一は、北垣による同志社生徒に対する資金援助である。一八八二(明治一五)年十月には、同志社生徒で鳥取県人林拾の学費補助願を、新島の要請もあつてこれを引き受けている。この過程で注目されるのは、この問題で京都府知事が直接夜に新島宅を訪問している事実である。北垣の新島宅訪問は、この後も史料上かなり多く見られる。

第二は、北垣が新島を通して、アメリカの工学技術を取り入れようとしたことである。一八八三(明治一六)年三月五日、新島は京都府庁で北垣に会い、破石薬について相談を受け、その結果であらうか、三月七日、新島は、サンフランシスコのフレンド・ピーポディ社に破石薬の見本を送るよう依頼している。「破石薬」を京都府は何のために必要であつたのか。琵琶湖疏水の工事が始まるのは一八八五(明治一八)年であり、この時期は京都・官津間車道工事である可能性が高いが、いずれにしても新島のアメリカでの知識を北垣も欲していたことは確かである。

第三に、新島・北垣間の親密な関係を示すのは、北垣の子弟に新島が大きくかわつていた事実である。北垣には、夫人多年との間に三男三女がいた。新島がかかわるのは、長男確の教育問題である。一八八七(明治二〇)年二月頃、北垣は確の英学修行について新島に問い合わせをする。二月二十五日、新島は北垣に書を書き、英学校生徒一名を家庭教師として推薦している。その後確は、同志社英学校に入学したが、結局卒業できなかったらしい。一八八九年三月二三日、新島は熊本英学校の海老名弾正に書を送り、同校で確の教育を依頼した。

このような関係をもとに、新島は多様な形で北垣から同志社に対する援助を引き出していった。具体的には、さまざまな同志社の行事に対する北垣、あるいは京都府関係者の出席である。新島は、一八八四(明治一七)年四月五日欧米再遊の旅に出発し、翌年十二月十七日に京都に帰着する。帰着翌日には、同志社礼拝堂、書籍館(現有終館)の定礎式、続いて同志社創立十周年祝会が運動場において催され、これらの行事に北垣府知事・

中井弘滋賀県知事ら五、六百人が出席する。一八八六(明治一九)年六月二十五日には、英学校第十一年期卒業式、新築講堂(チャペル)の捧堂式を執行し、新島は二日前に北垣の来社を要請するが、北垣は参加せず、上下京区長、常置委員らが来賓として出席した。しかし、北垣は七月三日にこのチャペルを見学している。翌年六月二十四日には、同志社神学科卒業式、ついで同志社英語普通科卒業式に北垣およびその他の来賓が出席している。十一月十九日には、同志社看病婦学校、病院開業式にも出席する。

一八八九年六月二十七日には、看病婦学校および女学校の卒業式が行われるが、北垣は新島の要請によりこれにも参加し祝詞を述べている。おそらく、これ以外にも同志社関係の行事に新島は北垣知事の出席を要請し、北垣は自己の都合のつく限り出席していたのではないかと思われる。

新島はまた、さまざまな許認可に北垣の力を借りようとした。一八八六年は同志社にとつて四つの重要な許認可の問題があつた。一つは同志社看病婦学校認可、

二つ目は同志社病院の認可、三つ目は神学専門科設置の認可、四つ目は一八八三年一二月の徴兵令改正に対応した処置、すなわち歩兵操練科設置の認可である。これらをめぐって、新島は何度も北垣を訪問している。このうち三つ目までは、

北垣の陰の援助もあって成功することができた。しかし四つ目の歩兵操練科設置は、たとえ北垣の善意があったとしても、森有礼文部大臣や文部官僚の壁の前には新島の努力は徒勞に帰すのみであった（ただし北垣がこの問題をどのように考えていたかを知りうる史料はない）。

#### 四 大学設立運動と北垣

新島に対する北垣の後援が明確に現れるのは大学設立運動である。北垣がいなければ運動があのように拡がったかどうか疑わしい。

北垣が、本格的に新島の大学設立運動にかかわるのは一八八七年以降である。この年、新島は北垣を通じて原六郎横浜正金銀行頭取を知ることになる。同年六月、東上した新島は、北垣の添書をもって原に会い、寄付金応募の約束を取り付

ける。なお、原は、北垣の紹介で、土倉庄三郎の長女で同志社女学校生徒土倉富子と結婚するが、翌年二月二十五日、祇園中村楼で行われた式は、北垣の媒酌、新島の司式であった。

一八八八（明治二一）年は新島が大学設立運動を本格的に再開するとともに、北垣のこれに対する援助も拡大した年である。そのもつとも象徴的事例は、四月十二日の知恩院山内の大広間を会場にした明治専門学校設立のための大集会である。この日の集会には、北垣知事・府会議員・上下京区長・府内有志家ら「六百有余名」が参加する。この日新島は、「私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民ニ告ク」と題して演説し、北垣も賛成の演説を行う。この集会の会場は、知恩院側の説明によれば、最初京都府社寺係中川武俊の書面による依頼、さらに北垣が大きいかかわった保勝会の会員内貫甚三郎の直接の要請により貸し出されたものであった。明らかに北垣の力により開かれた大集会であったのである。この間、新島は、北垣と何度も会談し、京都府官吏の出席を要請し、北垣も新島邸を訪問する

など積極的にこれに応えた。

北垣は、その後も区長に運動への関与を懇諭し、新島の要請により原六郎の寄付金出金に努力するなど、側面の支援を惜しまなかった。

一八八九年になると、病勢の進行もあつてか、新島の北垣への依存度はより露骨になっていく。一月十六日、新島は、内海忠勝兵庫知事への協力要請に失敗した後、翌日北垣に書を寄せ、「自分には種々熟考しても名案はなく、京阪神の有力者（豪家・豪商）を取りまとめるため『閣下特殊の御工夫』をいただけませんか」と哀願する。また、地方官会議出席のため東京滞在中の北垣に宛てた二月六日付の新島の書では、「多くの知事方に面会の際同志社大学設立のことをお話ししていただき、将来その地方に遊説員出張させる時充分ご助力いただくよう御頼みいただきたい、また御旅館お尋ねの知人中へも同志社大学設立旨趣書等をお渡しいただきたい」と要請する。

北垣も新島の熱意に応えた。『塵海』に次のような記事がある。この年十月東上していた北垣は、二十九日に三井銀行の

西村虎四郎に会った際、同志社の理化学教育が京都商工業に有益であること、すでに大坂住友、藤田、東京岩崎、渋沢、原等が寄付を承諾していることなどを力説し、西村に三井一党の寄付を承諾させる。これを見る限り、北垣自身が運動員の様相を呈していたのである。また、同志社の教育の中で、北垣が最も期待していたのは理化学教育であったことがわかる。以上のように、新島は明らかに北垣を頼りにした。したがって、新島は、一八八八年以降は大学設立運動に関する情報をほとんど選ぶことなく、同一志向の人物に対するように伝えていた感がある。そして、北垣も、それに呼応し、政府顕官や地方官への添書をほとんどためらいなく書いていた形跡がある。新島の宿願達成に果した北垣の役割はもっと知られていい。

(注) 年号は明治五(一八七二)年まで和暦を優先し、明治六(一八七三)年以降西暦を優先した。

## 北垣国道略歴

- |             |       |                                                                                   |
|-------------|-------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 1836(天保7)年  | 8月27日 | 但馬国養父郡熊座村(現兵庫県養父郡養父町)で庄屋北垣三郎左衛門、りきの長男として生まれる。幼名晋太郎。                               |
| 1843(天保14)年 |       | 儒者池田草庵の青谿書院に入り、漢学を学ぶ。                                                             |
| 1863(文久3)年  | 1月    | 尊王攘夷運動の影響を受けて上京。                                                                  |
|             | 10月   | 但馬生野の変に加担。事失敗の後、因州ついで長州に逃れる。                                                      |
| 1868(明治元)年  | 1月    | 新政府軍の北越戦争に加わり、功により鳥取藩の応接方になる。                                                     |
| 1869(明治2)年  | 6月    | 弾正少巡察を経て後、弾正大巡察に任命される。                                                            |
| 1871(明治4)年  | 8月    | 北海道開拓使七等出仕。1874(明治7)年まで、浦河支庁、樺太支庁在勤を含め、北海道開拓事業に従事。                                |
| 1875(明治8)年  | 12月   | 元老院少書記官。                                                                          |
| 1877(明治10)年 | 4月    | 西南戦争下の熊本県大書記官に任命される。                                                              |
| 1878(明治11)年 | 7月    | 内務省庶務局長に任命される。                                                                    |
| 1879(明治12)年 | 6月    | 高知県令に任命される。(～1880年12月)                                                            |
| 1880(明治13)年 | 3月    | 徳島県令を兼官。(～1880年12月)                                                               |
| 1881(明治14)年 | 1月    | 京都府知事に任命され、11年半にわたって京都府政を主導し、琵琶湖疏水など京都の近代化に足跡を残す。                                 |
| 1883(明治16)年 | 10月   | 宮内省(京都)支庁長を兼任。(～1885年5月)                                                          |
| 1892(明治25)年 | 7月    | 第4代北海道庁長官に。1897年7月までの5年に及び、小樽運河や鉄道など社会資本の整備、北海道移民の奨励などに力を尽くす。その後、貴族院議員、枢密顧問官など歴任。 |
| 1916(大正5)年  | 1月16日 | 京都で81歳の生涯を閉じる。                                                                    |